
砂漠の旅

ウィットテノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
砂漠の旅

【Nコード】
N7208N

【作者名】
ウィツテノス

【あらすじ】
故郷の村を捨てて、砂漠を二人と一羽で旅をするお話です。

一話

例年にない暑さの中、屋気楼で霞む延々と続く街道を、ラマと二人で歩いていた。

「ヨシユア、水を飲んでもいい？」後ろからラマが深刻な顔でそう言った。今まで我慢してたのだろう、よっぽど喉が渴いているようだった。

「ああ、いいよ」僕もそれに気づいていながら声をかけなかった。この場所で、水を失うのが怖かったから。

もう町を出てから一月経った。次の町まであとどのくらい歩けばいいのだろう。村はどうなっただろうか？ 家族は？ それを思うと、胸が焦燥感に駆られた。

「ねえ、ヨシユア」再び振り向くと、彼女は俯いていた。

「どうした？」

「やっぱり、戻ったほうがいいよ。事情を説明して、謝れば……」

「それは出来ない」

「だってそれじゃあ一体どうするの？ これからどこへ行くの？」

お金も食料も水も続かないのに、これからどうしたら良いの？」

彼女は涙目で珍しく感情を面に出した。僕は……何もいえなかった。彼女の言うとおり、どうしたら良いのか分からなかったから。

「ごめんね、私のためにこうなってるのに……。でも、このまま逃げ出しても……だから、戻ろう」

「それは絶対嫌だ」

「でも、このままじゃあ……」

僕にもどうしたら良いのか分からない。

でも、絶対に承知できない事だった。

「行こう。僕が何とかする」そうとしか、言えなかった。

夜になった。

今日は月が出ていて辺りが良く見渡せる晩だった。僕たちは街道から少し外れた、街道から死角になる小さな砂の丘で休む事にした。二人で過ごす夜も、もう、一ヶ月が経とうとしていた。

当初慣れない野宿に警戒して、夜盗などを気にするあまり眠れない夜が続いたが、今では良いのか悪いのか、ぐっすりと眠れる。だからだろうか、人がすぐ近くににいるのに気がつかなかった。

「すみません、私もここに一緒にさせてもらってもよろしいでしょうか？」

声をかけられて飛び起きる。傍に立っていたのは老人だった。すぐに周りを確認する。老人のほかには人の姿は無かった。

「起してしまつて申し訳ない。御覧の通り一人です。主人に道中で捨てられてしまい、ほとんど困り果てております。どうか、食べ物などを恵んで頂けませんでしょうか？」

月明かりに照らされた初老の男性は、疲れ果て、ともすれば泣き出しそうなほど深刻な顔をしていた。

その胸には、両腕で鳥かごが抱えられていた。

「構いません、どうぞこちらに」いつの間にか眠りから覚めていたラムがそう言つて、荷物を老人に差し出した。

多少の警戒心はあった。疑念も。だが断る事もまたしづらい状況だった。

「ありがとうございます……パン二つと水を少々頂ければ結構です…… 本当に申し訳ない」

老人は私の隣に座り込んでゆっくりと渡されたパンを咀嚼した。

「しかし……」老人は眉根を開いて僕とラムを見る。

「二人で旅ですか？ 二人ともまだお若いようですが……どこに

向かっているのです」

「どこにも」と僕は答えた。

「この街道の先に何かあるかも分かりません。もう一ヶ月、旅を続けています」

「ほう、何のために？」老人は不思議そうにつぶらな瞳を向けた。

「事情があつて、故郷の村を捨ててきました。どこに行くかは決めてません」

「おや、おいたわしい。その若さで放浪の身とは。何があつたのでしょうか」老人は気の弱そうな声音で尋ねる。

僕は答えた。

「村を治める領主が、初夜権などと言つて僕の許婚を連れ去ろうとしたのです」

「初夜権……貴方の村では、悪い風習があるのですな……」。

私に何か力になれることがあればと思うのですが……御覧の通りの老いばれでございまして」老人は力なく肩を落とすが、やがて再び顔をあげた。

「そうだ、旦那様の積荷から一羽珍しい鳥を盗んできたのです。

これをこの先にある都で売れば幾ばくかのお金になるやも……」

そう言つて老人は、先ほどから大事そうに抱えた鳥かごをこちらに差し出してきた。

僕は困つてしまつて、「なんですか？ この鳥は？」と受け取らずに聞き返した。見ればどこにでもいるような小鳩だった。

「なんだよー」と、鳥かごの中から声がした。

……鳥が喋つたのだ。

「御覧の通り、喋る鳥です。とても珍しいものではないかと」

「へえ、凄いい喋れるのですか？」と、ラマも興味を示したように鳥かごを覗き込んだ。

「はい、珍しいもので、人の言葉も分かるようです。よければ差し

上げます」

「お前もどうせ僕を捌くんだろ？」と中の鳥が呟く。

「わあ、凄い、本当に人の言葉が分かるの？」と、ラマが言つと「分かるよー。だから売らないでよ。喋るから」という答えが返ってきた。

ラマは感激していたが、僕は冷静に「確かに、珍しいですね。こんなものを頂いても良いんですか？」と聞くと、老人は構いませんと呟いた。

ラマは夜遅くまで鳥と語らうと、やがて疲れがきたのか眠ってしまった。

老人も疲れていたようで、一番先に眠ってしまった。僕は夜更けまで起きていたが、徐々に意識が遠のき、次第に眠りについたのだった。

翌朝、眠りの中誰かが呼びかける声で目が覚めた。

「兄ちゃん、兄ちゃん、鳥かごを開けてよ。開けてくれたら願い事を叶えてあげるから」そう鳥かごの中から鳥が囁いていた。

兄ちゃんとは僕の事らしい。鳥はこちらの方に顔を向けている。ラマは寝ていたが、老人の姿がなかった。

「昨日、君と一緒に来た人は？」

「あの男のこと？ あれは僕が食べちゃった。生意気だったんでね。一飲みで」

「ふーん」僕はたいして反応せずに、ラムを起す。

「こら！ ここから出しなさいと言ってるんだよ！ 願い事ぐらい君にだってあるでしょ？」

人間なら、空を飛びたいとか、翼が欲しいとかいろいろ」

ずいぶん饒舌な鳥だった。

昨日あまり喋らなかったのに、今日は元気みたいだ。

「おはようヨシユア……昨日の人は？」

「うん、もう行っちゃったみたい。僕達も旅を続けよう」

そう言つて僕は鳥がごを持つと、ギャーギャーとうるさい鳥を放つておいて、歩き出したのだった。

街道。

荒野の中にただひたすら、地平線まで続いている道を、僕達は歩いていた。

周りは小高い砂丘が、時に小さな山よりも高く立ちそびえている。気温は常に高温で、歩いてるだけで眩暈がしてくるような過酷さだった。

「おじいさんの話では、この先に都があつて、そこで一息つけるみ

「たいだよ」と、僕はラマに話しかける。

ラマも汗を顔から滴らせて、とても辛そうだった。

「まったく冗談じゃないよ。こんな暑いのに水浴びも出来ないなんて。」

もつと僕の水場に水を増やしてよ」と鳥が籠の中で器用に羽で餌籠の隣の水桶を差した。

「だめだ。水は貴重なんだから。飲めるだけマシだろ」と僕はぶっきらぼうに言うのだが、鳥は不愉快そうだった。

「冗談じゃないよまったく。鳥は体温調節のため適度に水浴びしないと自己体温調節機能が崩壊して最終的に死に至るんだよ？」

水、増やしてよ」

もつともらしい嘘をつくと言いたかったが、そんな元気もなかった。

「なあ、鳥。後どのくらいで都につく？」

「もうへばったの？ 情けない人間。僕を籠から出してくれれば都までの距離を飛んで確認してきてあげるのに」と鳥はわざとらしく残念そうに呟いた。

その手には乗るもんか。籠から出したら間違いなく逃げる。そして売ることが出来ない。絶対それは出来ない。

僕は答えずにぜえぜえと歩き続けたのだった。

前方から商隊の一団がやってくるのが見えた。

その姿は徐々に大きくなってきて、僕達の横を通り過ぎようとした時に、声をかけられた。

「やあ、長旅ご苦労様。私等は行商に出てるものだけど、何か買っていくかい？」

と、先頭の商人風の男が止まって、こちらに話しかけてきた。

ラマは多少警戒していて、僕の後ろに隠れた。

商人でも武器を持つてることがあるから、下手なことをすれば襲われると村で聞いていた。

だから僕も緊張した。

「いえ、旅の荷物は充分備えています。そちらも気をつけて」と言つて僕達は歩き出そうとするが、商人は尚も話しかけてきた。

「おやあ、そうかい？ その割には荷物が少ないよ。都までまだまだずつとかかる。何か買つていきなよ」商人が笑顔で食い下がる。

しかし、僕らには金がない。どうやって断るか考えていると、「ははは、都まで時間がかかるつて？ 商売上手だねえ。都は今晚の内につくから心配ないよ。おじさん。ご苦労さん」

と、僕の声で鳥が喋っていた。

「……まあ、それもそうだね。旅をするなら、気をつけて。じゃあ」と、商人の一隊は再び歩き出した。

「お前、いま僕の声で……」と鳥に話しかけると「だから僕は魔法が使えるつて言つたろう？ だから籠から出してよ」

「それは無いけど凄いじゃないか。声を変えられるんだね」

「うん、でしょう。魔法も使えるんだ」 ラマも驚いたように鳥に話しかける。

「大人のおじさんをやり過ぎちゃうなんて凄いね。頭も良いんだ」

「うん、頭はいいって昔から言われる。今日で五十回目くらい。魔法も使えるよ？」

「魔法は売った後で存分に使えばいいよ。ありがとう助かったよ」

「うん、でもね、籠から出さないと魔法が使えないんだ……ね？」

ほら、ただの鳥でしょ？ 今は」

「うん、鳥だけ喋れるという点で凄いよ」「だからその喋れるという凄い点が魔法すら使えるんじゃないかということに繋がっていいくと思わない？」

僕は無視して再び歩き出すと、鳥はまたギャーギャーと叫びだした。

夜、街道の遙か先に城門が見えてきた。

城壁に囲われた、見たことも無いような大都だった。

ここまでくると足も凄い痛みで、足の裏はもう感覚を失っていた。

「ヨシユア、このまま都に入ってもお金がないよ。今日は城壁の近くで休もう？」と、ラマが言う。

確かに、その通りだった。

「分かった。じゃあこの辺で休もうか。岩場を探そう。お金は明日作るから」

「こら！ それは僕を売るという意味なのか？ 自分で働こうとせず、僕を売ってお金を作ろうと言っのか？
そうなのか？ そうなのかい？」

「うん、君には悪いけど……」

「酷い話だよ。僕はもう知らない。ぴよぴよと」鳥はいじけたように、何も喋らなくなった。

翌日、岩場から起きだして、早朝の都の中に入っていった。

雑多に涌く人々。巨大な石段。ただひたすら降りていく階段。その遙か下方には大きな広場があり、噴水とそこに群がる人々がいる。石段は町の入り口の至るところに設置され、その全てが下方の広場へと繋がっている。

問題は底の広場に行くまでの距離で、それは霞んでしか目に見えない。

住民達は石段の周りに住居を作り、石段を道路のように使って上り下りしていた。

なんて効率の悪い都市図。

それでも都市は活気付き、石段にはまばらに商人達が露天を開いていた。

「凄い……」ラマがその光景を見て呟く。僕も同じ気分で、二人で城門の傍で呆然と町並みを見下ろしていた。

「ほれ、突っ立ってないで早く僕を売れよ。そしてお前達はその金で新婚旅行でもすれば良いんじゃない。ふん！ やだやだ。ぴよぴよ」

「あ、ああ。そうだな。売らなきゃご飯も食べられない……」僕は都市の光景に見とれていた。

「ねえ、ヨシユア。この子、売るのはやっぱりやめにしない？ 普通の鳥と違って喋る事が出来るから、なんだか気分が悪いよ」とラマが言う。

「ねえ、僕を、助けて？」と鳥も鳥がこの網に飛びついてきた。

「……分かったよ。君がそういうなら、売らない事にする。でも、またしばらく野宿になるよ」

「うん、大丈夫。我慢するから」とラマが苦笑した感じで言った。

「ついでに籠も開けて？ ご主人様」と鳥が甘えた声で言うので、鍵を外して開けてあげた。

売れないなら逃がしても別に構わないと思ったのだ。

「もう売る気はないから、どこに行ってもいいよ」「じゃあね」と二人で言うと、鳥はわなわなと震えていた。

「どうした？」あまりに出てこないから、不審に思っただけを覗いて

問いかけてみた。

「まさか……ほんとに、出してくれるとは……ありがとう……」
「……！」突然鳥は籠から飛び出ると、顔に体当たりしてきた。

いや、抱きついてきたようで、羽で僕の顔を覆っていた。

「分かったから、もう自由に飛んでいいよ」と言っのだが、鳥は僕の肩に乗ったまま飛び立とうとしなかった。

「ユーイズ御主人」

「離れたくないの？」とラマが聞くと「ユーイズ奥様」と言いながら鳥は頷いていた。

二話

二人と一匹で石段を降りていく。

この都市で仕事を見つけようと思った。

そのために、どこかで仕事を募集していないか、聞き込みをすることにしたのだ。

何刻もかけて底の広場までたどり着くと、その頃には日がくれていた。

二人で疲れきって、噴水の近くのベンチに座ると、もう足が立たなくなるほど辛かった。

「ねえ、ヨシユア、今日はこれくらいにして、ここで休みましょう。ここなら人もいるし、安全だと思う」男の僕でさえ疲れているから、ラマは一層辛そうだった。

「ああ、そうだね。ここで、休もうか」僕はベンチの下に横になる。ばさばさばさ。

羽音がしてお腹に何かが止まる感覚がした。

マリだった。この鳥の名前はマリというらしい。

夕方頃から出かけると言い出して飛んだつきり帰ってこなかったが、そのままだここに行ってしまったんだと思っていた。

「おかえり」と、疲れて閉じかけた瞼を開けて呟くと、マリは毛づくろいを始めながら言った。

「まったくこんなところにいたの？」

僕が出かけるといったらその場で待つてなきゃ迷子になるんだからちゃんとその場に居なきゃダメだよ？

こんな場所でないにしてるの？」

「見ての通り、野宿だよ」

「プー太郎じゃ飽き足らず家無き子になろうつての？」

いかなね、いかな、ぴよ。

不幸が顔に滲み出ちゃうよ、そんな生活してると。

もつところ、明るい顔してよ。産んでくれてありがとうみたいな」
マリは一人明るかった。

「こんな状況で明るくなれるわけないだろう……」

「あ~~~~、いかな！ いかなね、うん。

オーラがでてる。家が無いオーラが出てる。

ついてきなさい。

僕が人生いかに簡単に渡っていけるか教えてあげる。人生どんだけ楽なんだろうって。ぴよ」

そう言つてマリは近くの看板に止まると、羽を振つてこちらを呼んでいた。

しかたなく僕はラマを起して、マリの後についていった。

マリは僕達を宿に案内すると、疲れて倒れそうになっている僕達に一人明るい調子で言った。

「良いかい？ ユーたちは宿に入って店員の前まで行くんだ。後は僕が喋るから笑ったり喜んだりしたまえ。そして泊まれたら笑ったり喜んだりしたまえ」

マリはそんなことを言いながら僕の肩に止まり、しゅっぱーつ、と明るい声を出した。

僕は仕方なく、他に泊まれる方法も無いのでマリを頼る事にして、宿の中に入っていった。

宿の中は明るく、テーブルが三つあって、けれどもそこには誰もいなかった。

奥のほうに気だるそうにしてる店員が一人いるだけで、静かだった。僕は中に入ったことを多少後悔しつつ、緊張しながらもラマと一緒に店員の前に立った。

店員は僕達の相貌を見るなり一瞬不審そうな顔をしながらも、すぐに笑顔で取り繕った。

「こんばんわ。お泊りですか？」

「いえ、客ではありません。申し訳ないが店の責任者を出していただけですか？」

私は廩院事務室の租税課で、この都の税の取立てを担当しているワハブ様の使いの者です。

責任者の方に脱税の嫌疑がありますので、事情を伺いに参りました。ワハブの使い、と言えば通じる筈です」

「はあ………分かりました………」店員は面食らったような顔でこちらを見ると、店内に入っていた。

僕はマ리에言われたとおり口を開閉させて合わせてはいるが、当然言ってる内容は嘘なので心臓の高鳴りが凄かった。
しばらくして、店の奥から痩身の男性が早足で歩いてきて、こちらをまじまじと見る。

「お待たせいたしました。

税務官の使いの方と聞いたのですが、何の御用でしょう？」

「その前に、書状がこちらに届いておりませんでしたか？
再三に渡って出頭するよう書状でまずご連絡を差し上げたはずですが？」マ리는多少強い口調でそう喋る。

店の主は一瞬驚いたような顔をした。

「いえ？ そのようなものは届いておりません。

本当に私の店の話ですか？ なんのことだか身に覚えがありません」

「まず、先に私の来訪の目的を伝えましょう。

一つは書状が届いたか否かの確認です。

これは廩院の権利問題の話でもありまして、書状が届いたにも関わらずそれを無視して敢えて出頭しなかったのであれば、廩院の出頭勧告を受け入れなかった事に相当し、当然しかるべき刑罰が適用されます。

仮にもし万が一何らかの偶然、或いは事故等によって書状が届いていなければ刑罰は適用されませんが、私がこの場にて口頭での注意をしなければなりません。

そして二つ目。

そもそもこれが問題の本質なのですが貴方が大祖帝に支払うべき税を、資産を隠し、或いは故意に誤ったように偽装して報告していたという嫌疑が、

租税課の調査によって浮上したわけで、今日から数日間の簡易立ち入り調査、後日の本調査の許可の有無を確認したく参りました次第です。

この点に質問はございませんか？ まああるわけがないですが」とマリは怒ったような口調でぺらぺらと語る。

「いえ、ちょっと待つてください。そんなことはまったく身に覚えがありません。

脱税の話も初耳なら書状の話すら私には寝耳に水の状態です。何か、間違っているのでは？」

「つまり、租税課の職員である私が、地図でもなんでも間違えて誤ってこの店に来てしまったと？」

それとも廩院が納める租税課が、判断を誤って脱税の嫌疑をかけたとでも？ ふざけるなっ！」マリは怒鳴った。

「いえ、いえ、そうではなく、そうではなくて……。何のことだから、本当に分からないのです。

そもそも、租税課の職員が、なぜ私のところに来たのかも……」マリは途中で話を遮る。

「いえ、そういうくだらない言い訳は聞きたくありません。

とにかく今この場での立ち入り調査の許可と、意思の明示の後廩院まで御出頭ください。

立ち入り調査を拒否した場合廩院審査会にで審議された後、有罪であれば刑罰と、無罪であれば放免が言い渡されますがどう致しますか？」

「調査と言われましても……」

「どう致しますかと聞いてるわけであって貴方の芝居かもしれない
すつ呆けに私が答える筋合いはありません。
沈黙であれば拒否と見なしますが？」

「いえ、あの、とにかく廩院に確認させてください。
私が直接行つて、事の次第を、自分の身の潔白を話します」

「それがよろしい。賢明です。
貴方が廩院に行っている間に私はこちらの宿の調査、近隣住民への
聞き込み、帳簿その他資料の確認等行いますが、よろしいですか？
つまり、調査の許可についてです」

「はい、構いません。何も嫌疑をかけられるようなことはしてはい
ないからです。
店の者には事情を話しておきますので、好きなように調査してくだ
さい」

「分かりました。一応風評被害への配慮という事で店の通常営業に
ついては許可します。調査中であっても。

こちらも客を装つての調査と言う事になります。まだ、容疑ではな
く嫌疑でありますから、万が一にもこちらが誤っていた場合に備え
て。まあ営業するかしないかの是非はそちらの自由ですが。

むろん部屋に私たちが宿泊している間は通常営業の範囲内でありま
すので、宿泊料は後日銀行からのお支払いにてお支払い致します。
しかし調査である事には変わりありませんので、帳簿、その他店に
ある資料は確認させていただきます。

店の金品、貴重品等の移動は構いませんが、その際事前に連絡して
頂きます。

よろしいですか？」

「はい、構いません。店の者にもそのように言い含めておきます」

そうしてマリは、見事宿泊を勝ち取ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7208n/>

砂漠の旅

2011年10月7日10時42分発行